

原著

保育者のキャリア形成の過程に関する研究（3）

—保育士から幼稚園教諭、幼稚園教諭から保育士への転職理由の比較—

浅井 かおり¹⁾・浅井 拓久也²⁾

A Study of the Process of Career Development of Childcare Workers (3):
Comparison of Reasons for Changing Jobs between Nursery Teacher and Kindergarten
Teacher

Kaori Asai¹⁾ and Takuya Asai²⁾

要 旨

本研究は複線径路・等至性モデル（TEM）の手法を活用して、保育士から幼稚園教諭、幼稚園教諭から保育士にそれぞれ転職した際の理由を比較したものである。

研究結果から、保育士から幼稚園教諭に転職した際の理由は、幼稚園の先生への憧れ、年齢の問題への考慮、1人担任への挑戦、自分の力を試してみたい、短期大学で学んだ音楽を保育現場で実践してみたいという意欲からであったことが示された。幼稚園教諭から保育士に転職した際の理由については、個々の関わりをより重視したい気持ちの高まり、個々の関わりを学び深めたい、新規開設園に所属して一から保育や行事を作ってみたい、将来を見据え、自身が保育士向きか幼稚園教諭向きかを確かめたいという気持ちからであったことが示された。

転職したそれぞれの理由の違いについては、伝統のある幼稚園で1人担任としてクラス運営や保育実践に挑戦してみたいこと、あるいは新規開設の保育所で一から保育や行事を作り上げていく中で、子どもの個々の関わりについての学びを深めたいことであった。

保育を日々実践し続けるなかで反省や課題、新たな目標とより学びたいことが見付き、また新たな挑戦をしてみたいという意欲の高まりから、それを実践できる環境として、制度や組織、運営の異なる保育所あるいは幼稚園それぞれの道を選択し転職していたことが明らかとなった。

キーワード：保育者のキャリア形成、保育士、幼稚園教諭、複線径路・等至性モデル

1 はじめに

(1) 保育者という職業

子ども・子育て支援新制度が2015年度から始まり

新しく地域型保育事業が始まった。翌年には仕事・子育て両立支援事業も加わり、保育者の活躍する場が増えている。

2020年9月に開催された「保育の現場・職業の魅

1) 浅井かおり 東京未来大学保育・教職センター (Tokyo Future University)

2) 浅井拓久也 鎌倉女子大学児童学部 (Kamakura Women's University)

力向上検討会」では、保育士の仕事についての魅力や魅力を向上させるための具体案等について検討を行っている。その内容が記されている報告書「保育の現場・職業の魅力向上に関する報告書」（厚生労働省, 2020）にも「保育士は、子どもの存在を通して、命と向き合い、社会と関わる。豊かな人間性と高度な専門知識を備えた専門職として、保育を必要とする多くの子どもの多様な姿や育ちを定点観測のように見守りながら育み続けることができる魅力あふれる仕事である。」(p.はじめに)と記されている。

保育者は、子どものその日の機嫌や行動、目線など些細な変化に気づき、その時々の子どもの気持ちに寄り添い、子どもにとって最も良いと思うことを即座に判断しながら関わり続ける、高い専門性を必要とする職業である。そして、子どもの育ちつつある心や考え等を身近に関わりながら把握し、今後の子どもの育ちを見据えて継続的に関わるができる職業である。また保育者は乳幼児との関わりの中で自身も成長することのできる立場であることから、子どもたちと共に保育者も成長していくために、保育者自身も学ぶ意欲を高め、学ぶ姿勢を持ち続け、保育の専門職としての経験を積み重ねていくことが大切である。

(2) 研究の背景と目的

先行研究を概観すると、転職について検討した研究には、例えば、吉澤・宮地（2009）、小野寺（2012）がある。吉澤・宮地（2009）は、ホワイトカラー正社員の転職の経験と残留意識との関係や組織コミットメントに影響を及ぼすのかについて論じている。小野寺（2012）は、今までの転職の経験が、現職以降の転職希望の意識にどのような影響を及ぼすのか、また離職の理由ごとに転職の意識に与える影響が異なるのかについて論じている。保育者や潜在保育士等の離職や継続、再就職に向けての研究には、神戸・上地・松浦・鳥越・森・中川・荒島（2016）、川俣（2018）、日向野・山極・藤後・角山（2018）、友野・笠原（2021）等がある。川俣（2018）は、

2006年に実施した質問紙の調査結果と幼稚園教諭の早期の離職状況についての検討を2017年の幼稚園教諭の就業の状況と合わせ検討を行い、日向野・山極・藤後・角山（2018）は、潜在保育士の退職した理由及び今後保育所等で働く際に求めるサポートや働くことへの意欲を明らかにしている。

TEMを用いたキャリアに関連する研究には、林・佐々木・ト田・戸田（2018）や野屋敷・川田（2019）や浅井・浅井（2021）等があり、研究の課題に沿って論じられている。他には高丸・出雲・橋本（2020）が、女性労働者の望む働き方やキャリア形成における働き方を決定していく過程や労働者として働き続けるための戦略の検討を行っている。浅井・浅井（2022）は、保育所の担任を決定する園長の判断理由に焦点を置き、保育者本人が希望したクラスと同様のクラス担任配置をした際とそうでないクラス担任配置をした際の判断理由について論じている。

本研究においては、保育士から幼稚園教諭、または幼稚園教諭から保育士に転職した際の理由に重きを置き、それぞれの転職理由を比較することとした。

2 研究の方法

研究方法は、複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model）を用いた。その理由は、中絶経験者の多様性を描いた安田・荒川・高田・木戸・サトウ（2008）のように、研究協力者が歩んだ道やその時の思いや決断等を描くことができ、個の状況や径路について丁寧に追うことができるからである。研究者のみならず、研究協力者とともにTEM図を確認しながら作り上げる過程を通して、より研究協力者の歩んだ道やその時々選択理由への理解を深めていった。

研究協力者は、保育者歴10年の保育者Aである。安田・サトウ（2016）に「TEMでは、対象者数を1人、 4 ± 1 （3～5）人、 9 ± 2 （7～11）人のいずれかにすることが推奨されている」(p.40)と記されている。今回は保育者A1人の転職理由を検討することにより、思いや願い、歩んだ道筋を追うこととした。

調査日は、2022年7月30日(36分)、9月3日(27分)、10月15日(17分)である。()内はインタビューおよびTEM図の確認に要した時間である。

TEM図の作成については、インタビュー実施後に語りの内容を文字化し、意味のあるまとまりごとに集め、時系列に並べた。次にTEMの主な概念、「等至点」(EFP)、「必須通過点」(OPP)、「分岐点」(BFP)、「社会的ガイド」(SG)、「社会的方向づけ」(SD)に分類した。TEMに示した図例は図1である。「分岐点は径路が複線に分かれるような経験である。」安田・サトウ(p.228)、「必須通過点とは、多くの人が経験するような経験でありかつ等至点に至る径路にあって重要なものである。」(同上)、また「等至点に近づくことを妨害する力が『社会的方向づけ(SD)』、等至点に近づくことをサポートする力が『社会的ガイド(SG)』である。」(同上p.236)この概念に基づいて分類し、TEM図(図2)に記した。

また今回の研究は1人の保育者の転職理由を比較するため、就職するごとに等至点を設定した。短期大学卒業から最初にA保育所に就職をすることも含めTEM図の提示をした理由は、のちのキャリア選択に影響を及ぼしていることが判明したからである。

インタビューはオンラインで行った。1回目のインタビュー後にTEM図(図2)を作成し、2回目、3回目のインタビュー時に、前回のインタビューの内容の中で再度詳しく聴きたい箇所の聴き取りを行った。またTEM図を画面で共有し、両方で確認をしながらTEM図の内容に齟齬が無いよう修正を行い、研究協力者の歩んだ道やその時々思いや選択理由への理解を深めていった。

なお、本研究実施にあたっては、調査目的と内容、インタビューは任意であること、途中で辞退できること、回答は論文提出前に確認できること、インタビューデータは一定期間経過後に適切に破棄することを調査対象者に口頭で伝え、同意を得た。

3 結果

インタビュー後にTEM図を作成し分析を行った。現在の職業を第3期の等至点とし、現職に至るまでの過程、保育士から幼稚園教諭になるまで、幼稚園教諭から保育士になるまでを含め、TEM図に記した。

以下はTEM図の内容の補足説明である。

(1) 第1期 短期大学を卒業し、最初の就職をするまで

保育者Aは、幼稚園時代に先生と過ごした時間が楽しくて(SG)、その頃から、なんとなく幼稚園の先生になりたいと思っていた(SG)。そのため、進学も保育者養成校を選択し、短期大学に入学をする(OPP)。在学中は保育や保育に役立つ音楽について学んだ(SG)。そして初めての保育所実習に行く(OPP)。実習の中で0～5歳児と関わり、その中でも0～2歳児との関わりの中で可愛らしさや魅力を感じる(SG)。その後、幼稚園実習と2回目の保育所実習、施設実習に行く(OPP)。保育者Aは短期大学時の実習で1年次と2年次に同じ保育所にて実習を行っていた。その際、1年次の実習の時に0歳児であった園児が翌年の実習時には1歳児になり、1年間の成長を感じた(SG)。短期大学在籍中は幼稚園実習と施設実習も経験したが、保育所実習で感じた0～2歳児の著しい成長と、その成長を親としてではなく、保育士として見守ることができることを素敵だと感じ(SG)、施設実習まで終了したところで保育士になろうと決意をした(BFP)。その後、公務員保育士を目指し受験をしたが願いは叶わなかったため、短期大学に届いていた求人票を見に行く(BFP)。その中から一番地元に近いA保育所の就職試験を受けに行く。そして合格し(OPP)、A保育所に就職をする(EFP)。

(2) 第2期 保育士から幼稚園教諭になるまで

私立保育所に入職し、はじめは4歳児の担任となる。そのクラスは25名の子どもが在籍し2人担任で

あった（SG）。最初の1年は、短期大学在学中の実習時とは異なり、子どもや保護者と毎日関わるため、保育士業務の現実を感じながら日々保育をしていた。複数担任であったもう1名の先輩保育士に見守られながら（SD）過ごした1年であった。そして翌年は0歳児担任となった。そのクラスは子どもが10名、4名の保育士と複数担任で受け持っていた。保育者Aは、昨年度に来年度受け持つクラスの希望を園長に聞かれた際は0歳児クラスでも良いと話した。その後に園長から来年度は0歳児担任という話（SD）があり、0歳児の担任となる。4名の複数担任の中には保育歴の長いベテラン保育士がおり、子どもとの関わりなどベテラン保育士には上手くいくことも自身が行うと上手くいかないこともあり、毎日、試行錯誤の日々を送った。ベテラン保育士は口頭で説明するのではなく、見て学ぶような教えであった（SG）。辛いと感じることもあったが、その中でも、子どもの落ち着く方法や保育士の立ち位置、0歳児への細やかな配慮など学ぶことができた、勉強になる年であった。

そして翌年は2歳児担任となった。この時も特に自身の希望クラスはなく、園長から2歳児担任と話があった（SD）。この年は初めて主担当を任せられ、期待とどのようにクラス運営をしていこうかと迷いながら保育を行った。他クラスの先輩保育士に助言をもらいながら（SG）、担任をしていた。そして2歳児クラスの担任をしていた最中に、幼稚園で勤務をしている友人から、幼稚園教諭の中途採用は難しいという話を聴く（SG）。そして幼稚園教諭に転職することを検討する（BFP）。その後に自身でも調べると、新規卒業者の募集がほとんどだと分かり（SG）、自身の年齢を気にするようになる（SG）。その時に幼少期から幼稚園教諭になりたいと思っていた気持ちを思い出し、現在の保育所で3年間は働いたため、今しか出来ない幼稚園教諭にチャレンジしたい、1人でやってみたい、力を試してみたいと考えるようになる（SG）。その後に、保育士、幼稚園教諭向けの幹旋会社に登録をする。そして幹旋会社からいく

つか幼稚園の求人を紹介され（SG）、紹介された幼稚園に見学に行く（BFP）。以前より子どもたちが過ごす環境が大事だと感じていたため、園庭がある環境が良い、またピアノや音楽にも力を入れている園であったため、短期大学時に学んだ音楽を取り入れた保育をやってみたいと思った（SG）。主任保育士より、辞めないでほしいと話があったが（SD）、自身の意志は強く、その後にB幼稚園の就職試験を受けることを決める。そしてB幼稚園の就職試験を受験し、合格する（OPP）。合格をしたため、A保育所を退職し（OPP）、B幼稚園に就職をする（EFP）。

（3）第3期 幼稚園教諭から保育士になるまで

幼稚園教諭に転職して、はじめの年は3歳児の1人担任となる（SG）。保育所での3年間の経験を生かしながら、楽しみながら保育を行った。翌年は初めての5歳児クラスの担任となる（SG）。この年は、卒園する子どもを受け持つクラスだったこともあり、園長から幼小連携に向けた活動を教わり、実際に自身も体験しながら学んだ（SD）。それは小学校生活に繋げるために算数遊びをしたり、子どもの主体性を大切にしたりしながらの保育実践であった。それを身近で学び、充実した日々を過ごした。そして翌年も5歳児の担任をする（SG）。この学年の子どもたちは3歳児の時に受け持ったことのある子どもたちが多く、子どもたちの成長を感じながら関わる1年であった。また昨年度も5歳児クラスの担任であったため、見通しを持って保育をしていた。保護者とも子どもたちが3歳児であった頃と5歳児になって成長した姿を共有し、話をするにも嬉しさを感じていた。その中で、保育所実習で味わった、子どもの成長について感動した感覚を思い出し（SG）、初心を思い出す。そして次年度は4歳児の担任をすることになる（SG）。このクラスは子どもが30名在籍し1人担任であったため、集団保育の中で全体の活動をしつつ、個々を見る大切さや難しさ、どのように個々と関わっていったら良いか考えながら日々を過ごしていた。そのような日々の中で、個々の関

わりをより大切にしたい、個々への関わり方をもっと学びたい、次のステージに行ってみたい、将来を見据え、自身が保育士向きか幼稚園教諭向きかを確かめたい気持ちになった (SG)。そのため、保育士に転職することを検討する (BFP)。今回も保育士・幼稚園教諭向けの斡旋会社に登録をし、斡旋会社からいくつか保育所の求人の紹介がある (SG)。そして紹介された保育所を見学に行く (BFP)。新規開設園であったことから、一から保育や行事を作ってみたいと思う (SG)。理事長及び園長から辞めないでほしいと話があったが (SD)、自身の意志は強く、C保育所の就職試験を受けることを決める。そしてC保育所の就職試験を受け、合格する (OPP)。合格をしたため、B幼稚園を退職し (OPP)、C保育所に就職をする (EFP)。

4 まとめと今後の課題

本研究において、保育士から幼稚園教諭に転職した際の理由、幼稚園教諭から保育士に転職をした際の理由についての比較を行った。その結果から、保育者Aが保育士から幼稚園教諭に転職した際の理由は、幼稚園の先生への憧れ、年齢の問題への考慮、1人担任への挑戦、自分の力を試してみたい、短期大学で学んだ音楽を保育現場で実践してみたいという意欲からであった。幼稚園教諭への憧れ、年齢の問題への考慮に関しては、新規卒業者に限り採用している幼稚園は場所や状況により異なるだろうが、保育者Aの探した幼稚園は新規卒業者のみの募集がほとんどであったのだろう。年齢を考えて、20代を過ぎるとこのチャンスを逃したら幼稚園教諭にはなれないのかなと思った、とインタビューの中で語っていた。また1人担任への挑戦、自分の力を試してみたいについては、3年間保育士として勤務してきた中で自信がついたこと、保育所で複数担任として協働していく中で今後は1人でクラス運営をしてみたいという意欲、挑戦心から転職に踏み切ったと考えられる。インタビューの中で、今までは2人や4人の複数担任であったが、1人でやってみたい、力

を試してみたい、それができる環境を選んだと語っていた。さらに、短期大学で学んだ音楽を保育現場で実践してみたいという意欲に関しては、短期大学で保育における音楽活動の効果を学んだことで、それを実践できる場を選んでいった。このことを考えると、養成校の授業内容も保育者がキャリアを選択する際の一要因であったと言える。

幼稚園教諭から保育士に転職した際の理由は、個々との関わりをより重視したい気持ちの高まり、個々の関わりを学び深めたい、新規開設園に所属して一から保育や行事を作ってみたい、将来を見据え、自身が保育士向きか幼稚園教諭向きかを確かめたいという気持ちからであった。個々との関わりをより重視したい気持ちの高まり、個々の関わりを学び深めたいについては、1人担任を継続していく中で自身の反省や課題が次のキャリアを選択する際の一要因となっていた。また新規開設園に所属して一から保育や行事を作ってみたいについては、今までは伝統のある園で勤務し行事などは例年の反省を踏まえて行っていたが、初めて取り組むこと、一から作り上げていくことへの興味が沸いたとインタビューの中で語っていた。将来を見据え、自身が保育士向きか幼稚園教諭向きかを確かめたいについては、今まで保育士及び幼稚園教諭をそれぞれ経験した中で自身は幼稚園教諭向きだと考えていたが、将来長期的に働く事を考え、もう一度、保育士として働き、自身がどちらに向いているのかを確認してみたかったと語っていた。

以上のように、保育士から幼稚園教諭へ、幼稚園教諭から保育士へ転職した際の理由を比較した結果、共通点として、自身の力や保育者としての資質をそれぞれの場で試し確かめたいという意欲が見出された。また相違点として、幼少期の憧れの有無、伝統のある幼稚園での1人担任への挑戦、あるいは新規開設の保育所で一から保育や行事を作り上げていく中で、子どもの個々の関わりについて学びを深めたいことが見出された。

保育を日々実践し続けるなかで自身の反省や新た

な課題、目標やより学びたいことが見つかったこと、また新たな挑戦をしたいという意欲の高まりから、それを実践できる環境の制度や組織、運営の異なる保育所あるいは幼稚園それぞれの道を選択し転職していたことが明らかとなった。幼い頃の憧れや今までの保育を実践した中で学んできたことに加えて、自分のやりたいこと、やってみたいこと、より学びたいことが実践できる場を目指した先が保育所であり、幼稚園であったことが言える。保育所、幼稚園と場を変えながら学んでいき、そこで保育実践を積み重ねることにより、保育者としての質を向上し続

け保育者としてのキャリアを構築することに繋がっていったと考えられる。

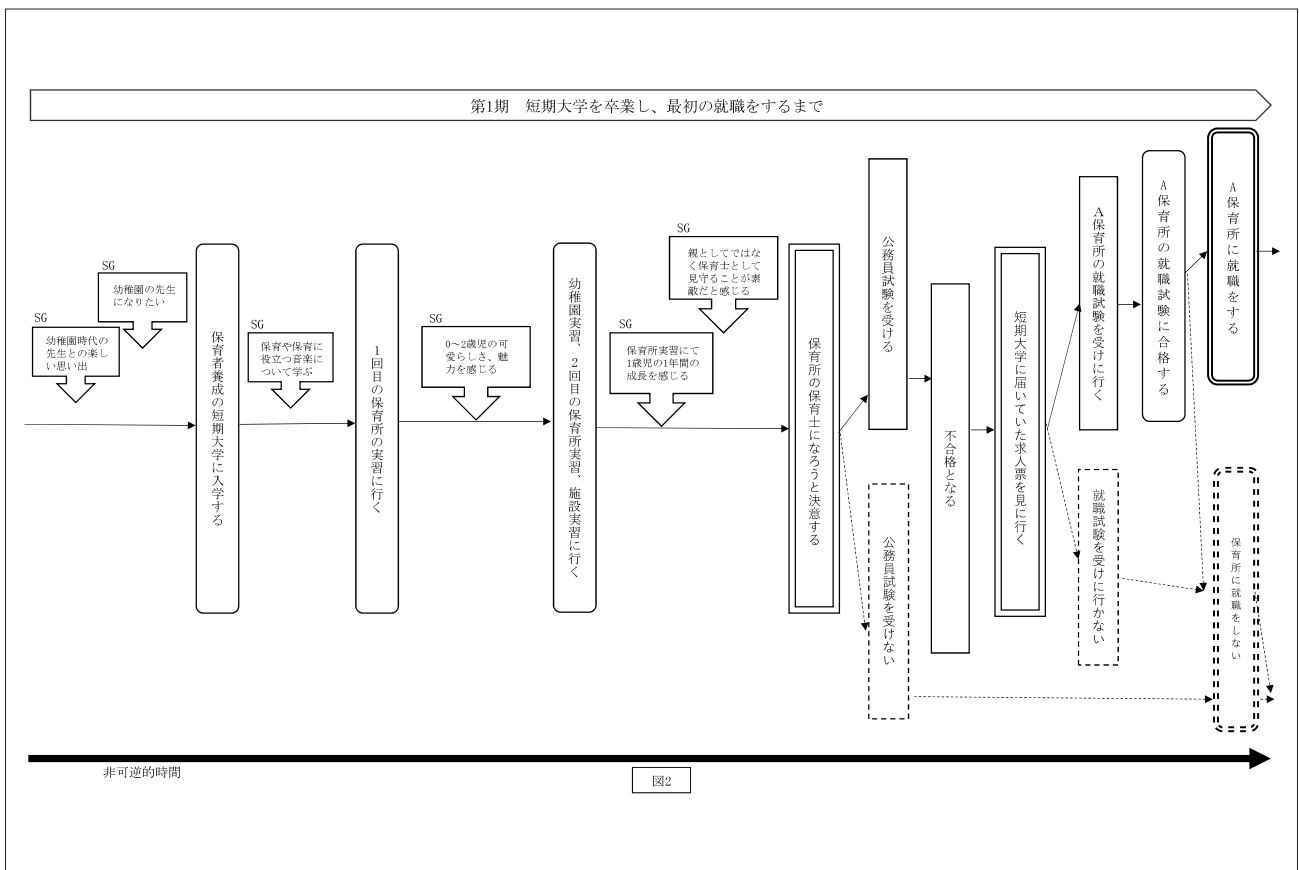
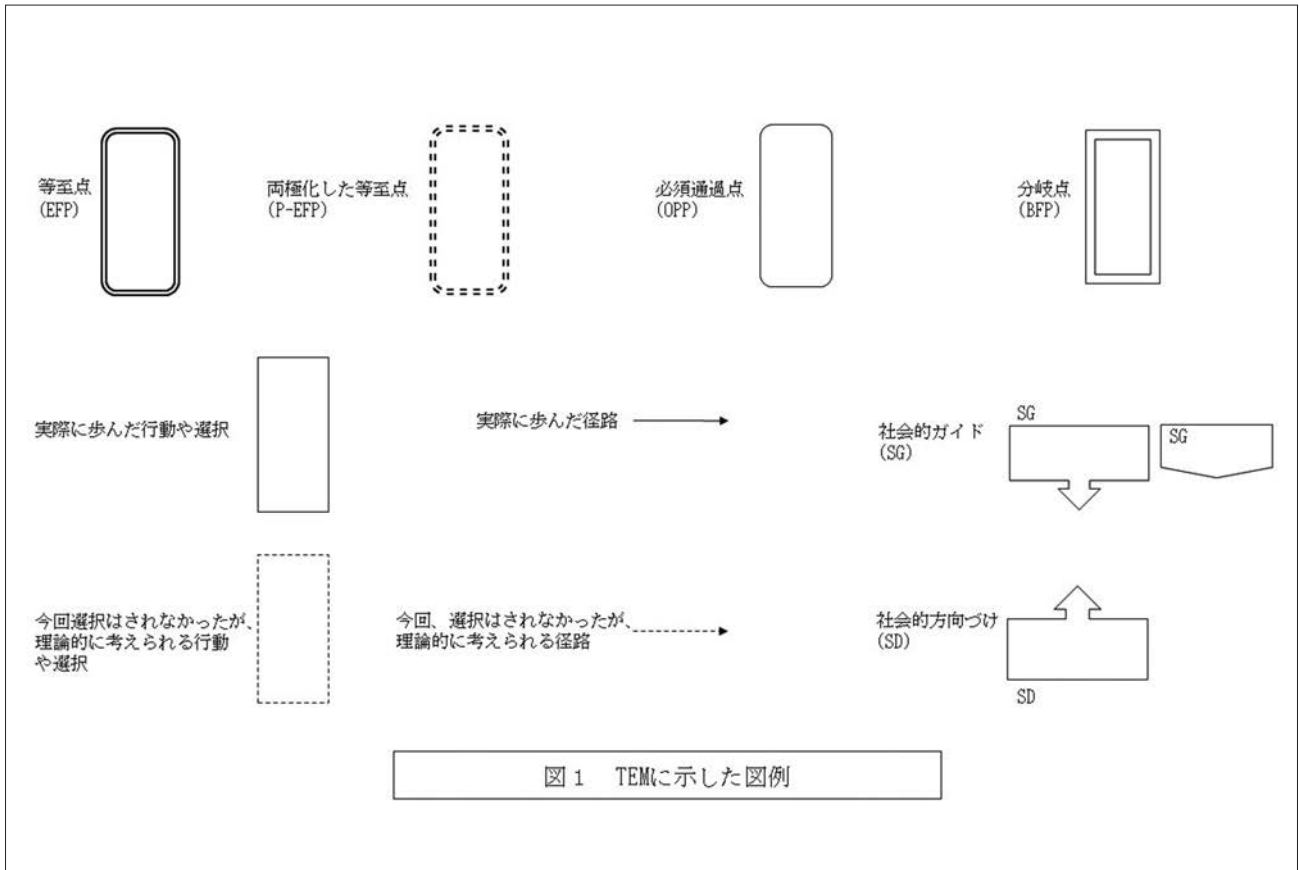
研究の結果は自身が感じた日々の保育についての反省や課題、挑戦心から、所属する場所を変えて自身の保育の質を向上し続けながら保育の専門職としてのキャリアを構築していく一例を示すことに繋がった。

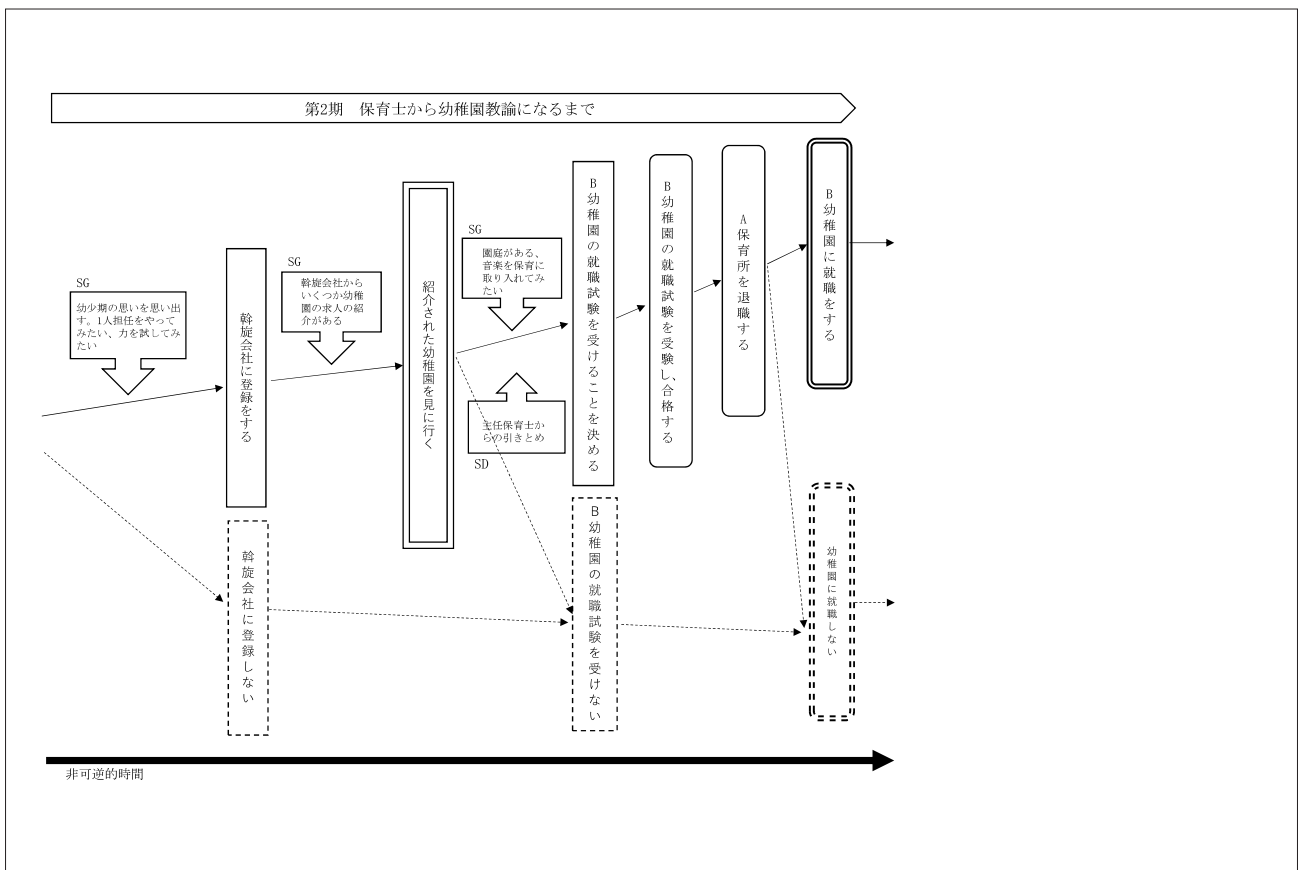
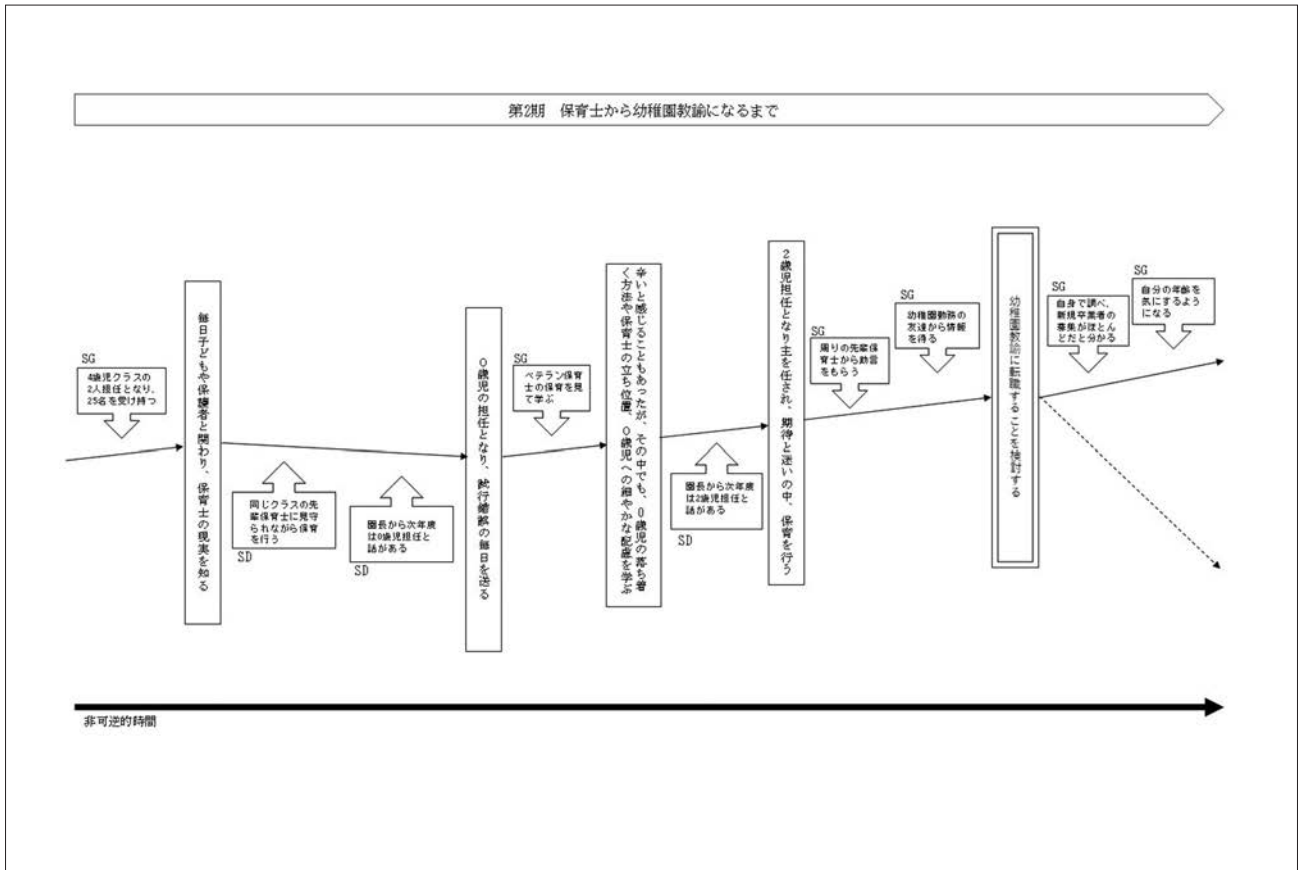
今後は、年代が異なる保育者の転職理由を比較し、年代による違いや保育経験年数等による違いの分析が課題として挙げられる。

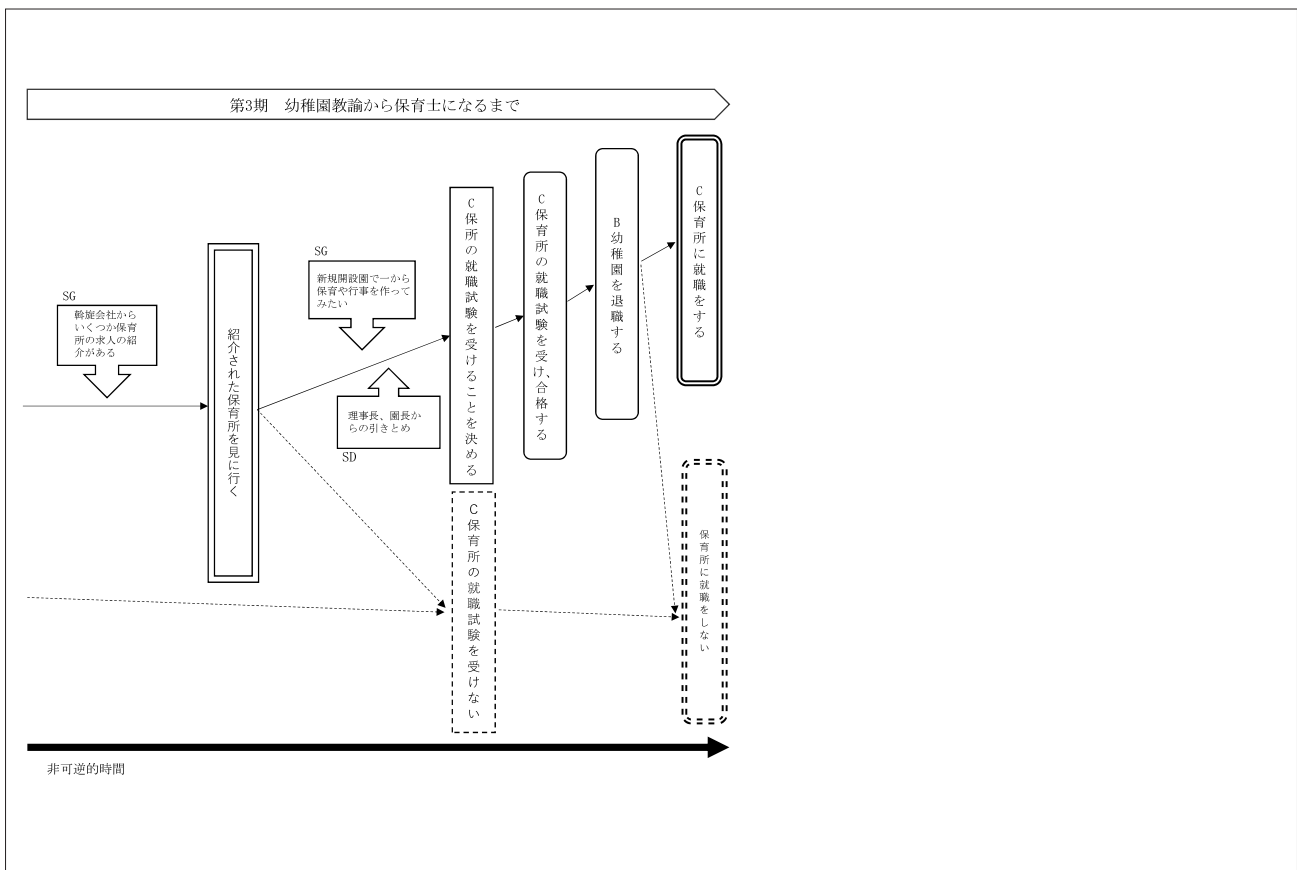
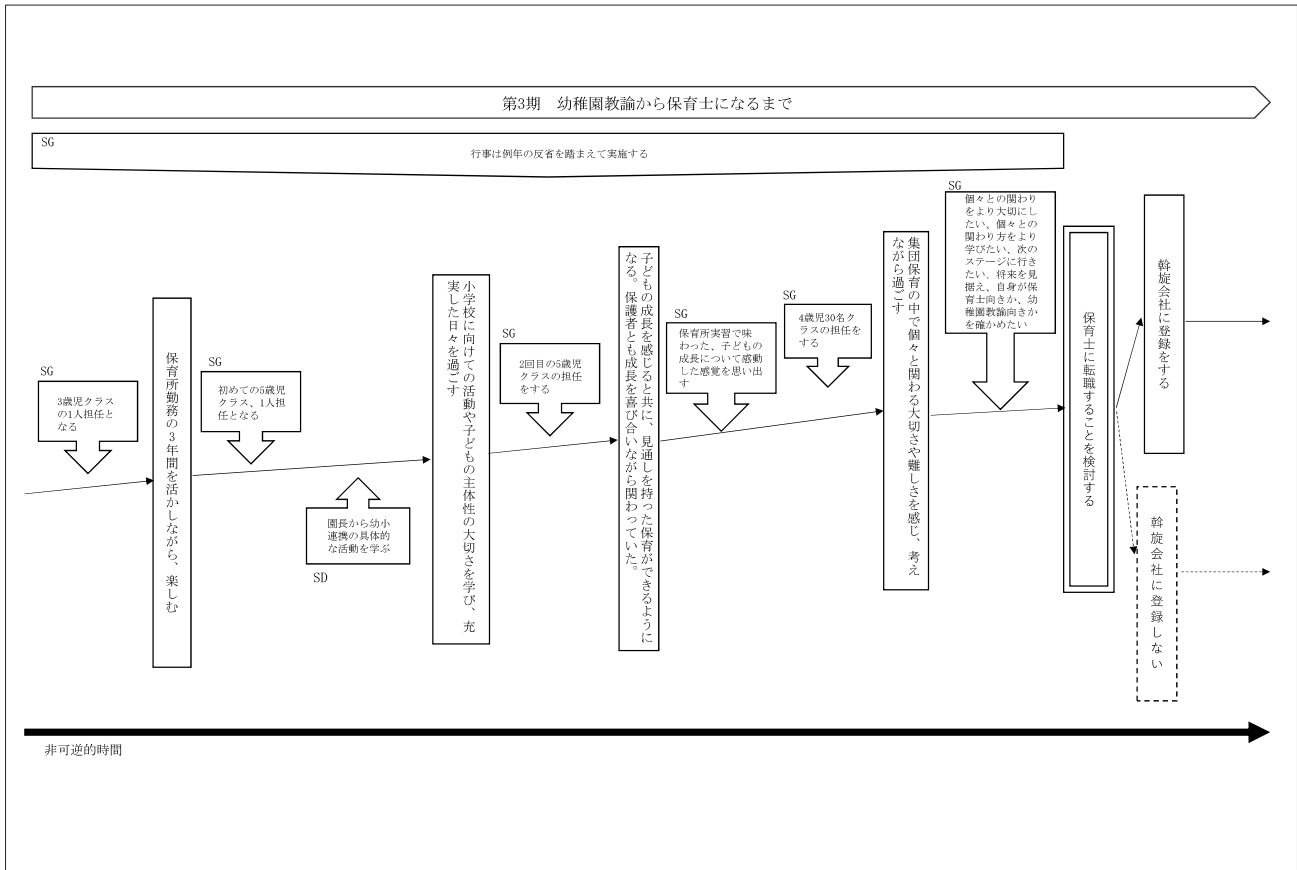
表1 TEMに記述した用語及び本研究における位置づけ

TEMに記述した用語	本研究における意味づけ
等至点 (Equifinality Point: EFP)	<p>【第1期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ A保育所に就職をする <p>【第2期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ B幼稚園に就職をする <p>【第3期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ C保育所に就職をする
両極化した等至点 (Polarized EFP: P-EFP)	<p>【第1期、第3期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保育所に就職をしない <p>【第2期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼稚園に就職しない
必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP)	<p>【第1期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保育者養成の短期大学に入学する ・ 1回目の保育所の実習に行く ・ 幼稚園実習、2回目の保育所実習、施設実習に行く ・ A保育所の就職試験に合格する <p>【第2期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ B幼稚園の就職試験を受験し、合格する ・ A保育所を退職する <p>【第3期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ C保育所の就職試験を受験し、合格する ・ B幼稚園を退職する
分岐点 (Bifurcation Point: BFP)	<p>【第1期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保育所の保育士になろうと決意する ・ 短期大学に届いていた求人票を見に行く <p>【第2期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼稚園教諭に転職することを検討する ・ 紹介された幼稚園を見に行く <p>【第3期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保育士に転職することを検討する ・ 紹介された保育所を見に行く

<p>社会的ガイド (Social Guidance: SG)</p>	<p>【第1期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼稚園時代の先生との楽しい思い出 ・ 幼稚園の先生になりたい ・ 保育や保育中に役立つ音楽について学ぶ ・ 0～2歳児の可愛らしさ、魅力を感じる ・ 保育所実習にて1歳児の1年間の成長を感じる ・ 親としてではなく、保育士として見守ることができることを素敵だと感じる <p>【第2期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4歳児クラスの2人担任となり、25名を受け持つ ・ ベテラン保育士の保育を見て学ぶ ・ 周りの先輩保育士から助言をもらう ・ 幼稚園勤務の友人から情報を得る ・ 自身で調べ、新規卒業者の募集がほとんどだと分かる ・ 自分の年齢を気にするようになる ・ 幼少期の思いを思い出す。1人担任をやってみたい、力を試してみたい ・ 幹旋会社からいくつか幼稚園の求人の紹介がある ・ 園庭がある、音楽を保育に取り入れてみたい <p>【第3期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 3歳児クラスの1人担任となる ・ 初めての5歳児クラス、1人担任となる ・ 2回目の5歳児クラスの担任をする ・ 保育所実習で味わった、子どもの成長について感動した感覚を思い出す ・ 4歳児30名クラスの担任をする ・ 個々との関わりをより大切にしたい、個々との関わり方をより学びたい、次のステージに行きたい、将来を見据え、自身が保育士向きか、幼稚園教諭向きかを確かめたい ・ 行事は例年の反省を踏まえて実施する ・ 幹旋会社からいくつか保育所の求人の紹介がある ・ 新規開設園で1から保育や行事を作ってみたい
<p>社会的方向づけ (Social Direction: SD)</p>	<p>【第2期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 同じクラスの先輩保育士に見守られながら保育を行う ・ 園長から次年度は0歳児担任と話がある ・ 園長から次年度は2歳児担任と話がある ・ 主任保育士からの引きとめ <p>【第3期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 園長先生から幼小連携の具体的な活動を学ぶ ・ 理事長、園長からの引きとめ







引用参考文献

- 浅井かおり・浅井拓久也 (2021)、「保育者のキャリア形成の過程に関する研究 (1) —乳児クラス担任と幼児クラス担任の比較—」、『東京未来大学研究紀要』、第15号. pp.1-12.
- 浅井かおり・浅井拓久也 (2022)、「保育者のキャリア形成の過程に関する研究 (2) —D保育園園長によるクラス担任決定の判断過程について—」、『東京未来大学研究紀要』、第16号. pp.1-11.
- 林恵・佐々木由美子・ト田真一郎・戸田有一 (2018)、「来日第二世代保育者におけるアイデンティティの揺れとキャリア形成のナラティブ—TEMによる描出と考察—」、『保育学研究』、第56巻第2号. pp.87-98.
- 日向野智子・山極和佳・藤後悦子・角山剛 (2018)、「潜在保育士の退職理由と再就職意欲の実態¹⁾」、『モチベーション研究』、第7号. pp.10-19.
- 川俣美砂子 (2018)、「幼稚園教諭の離職と継続の理由を探る」、『高知大学教育学部研究報告』、第78号. pp.343-355.
- 神戸康弘・上地玲子・松浦美晴・鳥越亜矢・森英子・中川淳子・荒島礼子 (2016)、「潜在保育士のキャリア研究—20代30代保育士の『退職者』と『継続者』の比較による離職防止研究—」、『山陽論叢』、第23巻. pp.49-64.
- 厚生労働省 (2020)、「保育の現場・職業の魅力向上に関する報告書」、『保育の現場・職業の魅力向上検討会』、p.はじめに.
- 内閣府 (平成29年)、「子ども・子育て支援新制度について 平成29年6月 内閣府子ども・子育て本部」
- 野屋敷結・川田学 (2019)、「保育者としての成長とキャリア形成：『保育者を続けている理由』からの考察」、『北海道大学大学院教育学研究院紀要』、第134巻. pp.91-116.
- 小野寺剛 (2012)、「転職経験および転職理由と転職希望意識との関連について—就業構造基本調査匿名データによる統計分析」、『21世紀社会デザイン研究』、第11号. pp.21-32.
- 高丸理香・出雲俊江・橋本嘉代 (2020)、「女性労働者のキャリア形成における生存戦略 —「複線経路・等至性モデル (TEM)」による分析—」、『アジア女性研究』、第29号. pp.21-35.
- 友野優里・笠原正洋 (2021)、「保育職からの離職と在職継続に何が関わっているのか：展望論文」、『中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要』、第53号. pp.1-7.
- 安田裕子・荒川歩・高田沙織・木戸彩恵・サトウタツヤ (2008)、「未婚の若年女性の中絶経験—現実的制約と関係性の中で変化する、多様な径路に着目して」、『質的心理学研究』、第7号. pp.181-203.
- 安田裕子・サトウタツヤ (2016)、「TEMでわかる人生の径路—質的研究の新展開」、『誠信書房』、p.40. p.228. p.236.
- 吉澤康代・宮地夕紀子 (2009)、「転職経験と転職ルートが組織コミットメントに与える影響¹⁾」、『産業・組織心理学研究』、第23巻、第1号. pp.3-13.

謝辞

日々の保育でお忙しいなか、インタビュー及びTEM図作成にご協力をいただきましたA先生に心より感謝申し上げます。

(あさい かおり・あさい たくや)

【受理日 2022年12月7日】